

中村大三郎画塾『塾誌』について―翻刻と解題―

付、『塾員による塾展記録とスクラップ』

Transcript (3) : The Journal of NAKAMURA Daizaburo's Private Painting School

福田 道宏

FUKUDA Michihiro

奥村 一郎

OKUMURA Ichiro

高村 佳子

TAKAMURA Keiko

川上真由子

KAWAKAMI Mayuko

キーワード：中村大三郎、日本画、画塾、京都画壇、百貨店

解題―塾展の記録―

本稿で翻刻紹介する中村大三郎画塾『塾誌』（中村実氏所蔵「中村大三郎画塾関係資料」のうち）については、すでに本誌で二度にわたり翻刻紹介するとともに前々号解題でその書誌的な部分を中心に概要に触れ、前号では『塾誌』中にみられる戦時下の塾展開催について若干の紹介をした。

今回翻刻するのは『塾誌』の最終部分にあたる一九四五年（昭和二〇）一月から一九四六年六月までの一年半である。なお、今回はこの『塾誌』にも登場し、密接な関係をもつ「中村大三郎画塾関係資料」のうち『塾員による塾展記録とスクラップ』¹を付けたりとして翻刻紹介することにした。そこで、この『塾員による塾展記録とスクラップ』を中心に、『塾誌』との関わりも含め、若干の解題を付したい。

『塾員による塾展記録とスクラップ』は現在までに調査し得た限りでは、一冊が残る。市販のスクラップブックを用い、そこに塾展の準備段階から終了まで日を追って記した記録を浄写した便箋を貼り込み、余白に新聞・雑誌の切り抜きを貼る。この一冊の中に展覧会五回分の記録があり、加えてもう一回分は

途中までで終わっている。

ここで、中村大三郎画塾の塾展について確認しておく。塾創立から間もない一九三三年に「中村大三郎画塾創立第一回展覧会」（六月二十七日～二十九日京都大丸）を開いたのち、一九三八年の「中村大三郎画塾第二回展覧会」（第二回展、四月八日～十日大札記念京都美術館）までの間に二度の小規模展を開いている。それぞれ、「中村大三郎画塾第一回試作展覧会」・「中村大三郎画塾第二回試作展覧会」と称するもので、前者は一九三七年四月一日から七日まで、後者は第二回展直前の一九三八年三月十九日から二十七日まで、会場はともに大阪松坂屋である。続く大規模な塾展は一九三九年の「中村大三郎画塾創立七週年記念展覧会」（第三回展、六月十四日～十九日東京府美術館・六月二十四日～二十六日大札記念京都美術館）だが、第二回展とこの展覧会の間にはやはり二度の小規模展を開く。一九三八年十一月十二日から十五日まで名古屋松坂屋で開催のものと一九三九年四月一日から七日まで大阪松坂屋で開催のもので、名称はともに「中村大三郎画塾小品展」である。仮に前者を名古屋小品展、後者を大阪小品展と呼ぶ。さらにその後、一度の大規模展（紀元二千六百年奉祝中村大三郎画塾展覧会第二回展）と三度の小規模展（うち一度は前回

の解題でも述べた通り、塾の主催とは言えず、塾展とすべきかどうかは問題はある。を開いたが、戦後は塾展開催に至る間もなく、中村大三郎の死をもって塾自体が解散してしまふこととなる。

以上の展覧会のうち『塾員による塾展記録とスクラップ』に収められるのは、

- ① 「中村大三郎画塾第一回試作展覧会」一九三七年四月一日〜七日
- ② 「中村大三郎画塾第二回試作展覧会」一九三八年三月十九日〜二十七日
- ③ 「中村大三郎画塾第二回展覧会」一九三八年四月八日〜十日
- ④ 「中村大三郎画塾小品展」一九三八年十一月十二日〜十五日
- ⑤ 「中村大三郎画塾小品展」一九三九年四月一日〜七日

である。続く第三回展は先述の通り途中で終わる。なお、記事の切り抜きはそれぞれ大きさも異なるため、概ね日付順ではあるが、一部日付が前後している。また、下に貼り込まれた展覧会の記録の日付とは全く関係がない。そのため、今回の翻刻では先に記録本文を翻刻して掲げ、続いてスクラップされた切り抜きを展覧会ごとにアルファベットでAからの記号を付して書き起こした。また、記事の傍らには、ペン書きで掲載紙誌名と日付が書かれており、この部分はへで括弧で示した。

本資料で注目すべき点は、塾展開催に向けて、塾員たちが分担して会場や様々な業者、関係機関などと折衝を行って、組織的かつ自主的に運営されていたことがわかる点である。もちろん、決断を下すに際しては、師大三郎に相談し、また決定事項は逐一、大三郎に報告しているものの、塾員による分担で準備が進められていた。また、スクラップを見ると、記事は中村大三郎画塾の塾員の作品をかなり好意的にとらえていたこと、そして、美術界において注目度が高かったことが明らかにされる。詳しくは翻刻をお読みいただきたい。なお、新聞雑誌記事のスクラップ以外に、出品目録と案内状も貼り込まれていたため、これも翻刻してある。

さらに、領収書一枚が貼り込まれている。これは①第一回試作展の末尾に貼り込まれたもので、翻刻していないが、ここに挿図として示す(図1)。実際には恐らく②第二回試作展の会期終了後の一九三八年四月一日条に「松坂屋京都仕入部中村作太郎氏来訪。売上代金領収す」とあるものがこれだろう。「支払通知書」と表題が書かれ、一九三八年三月三十一日付、京都松坂屋会計係の発行で、支払期日は一九三八年四月一日、支払先は塾員の佐々木啓陽で、摘要に「加藤美代三山他六点」とあり、金額は二五〇円七五銭である。②の記録本文を見てみると、会期中に売約がついたものが列挙されているが、その作品の

うち松坂屋の美術部を通したものの代金ということだろう。あまり表に現われることのない、こうした塾展における作品の売買の一端が明らかにされるのは興味深い。

『塾誌』との関係について一

言述べるなら、『塾誌』にも塾展開催に至るまでの準備の過程は登場する。いわば重複している部分もあるだろう。一方で『塾誌』には一九四〇年六月の記事に第四回展に関連して「展覧会記録は別にある」といった記述で会期中の記録を略している箇所も見受けられる。現在までに調査した中に、この第四回展の記録は見当たらない。塾展に特化して記録されていること、そして、図書館などの公共機関で所蔵されていない新聞・雑誌の切り抜きも含むことは非常に貴重である。今回は紙数の都合もあり、充分に意を尽くさぬ部分もあるが、『塾誌』と併せて精査することで、昭和戦前・戦中期の画塾の営みが明らかになるはずであり、そうした検討は別稿に期することにした。

注

- 1 奥村一郎・福田道宏「中村大三郎画塾の研究」(『美術フォーラム21』一六号、二〇〇七年、一一四〜一二八頁)では、仮にこの資料を『展覧会日誌』と呼んだが、実際には会期中の日誌というだけでなく、準備段階から会期終了後までを日を追って書き留めたものを浄写したものと、掲載された新聞・雑誌記事の切り抜きとをスクラップブックに貼り込んだものであり、より実状に近い名称としてこの名を付した。

(福田道宏)

凡例

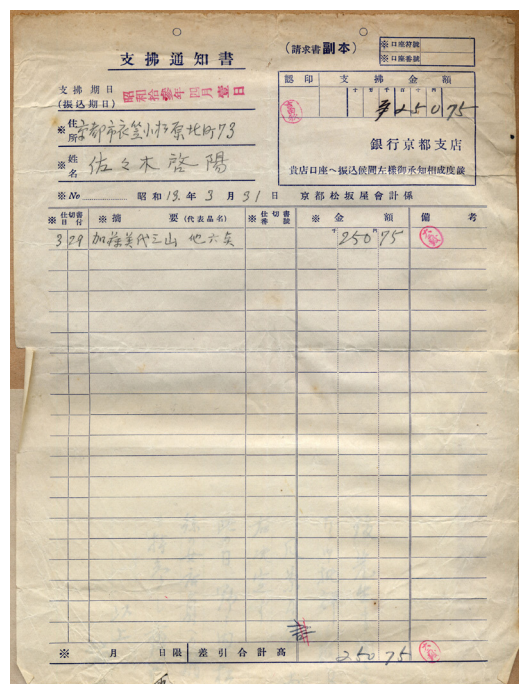


図1

- 一、かな遣い等は原文のままとしたが、旧字等は現在通用のものに改め、句読点を補った。また、誤字・当て字や、意味の取りづらい箇所については、当該箇所の右傍に「」内に正しい字やふりがなを補った。
- 二、『塾誌』の現状の錯簡と考えられる部分は、前々号掲載の別表1の復元案に従い、入れ替えて掲載した。
- 三、不適當と思われる表現も、当時の時代状況を考える上で貴重なものと考へ、原文のままとした。
- 四、個人情報にかかわる、公刊に不適切な箇所は一部略してある。

翻刻 『塾誌』——一九四五年から一九四六年——

【〇、前号からのつづき】

昭和廿年 塾誌

一月一日 午後一時 先生御宅にて年賀会

鍛冶、小野、加藤、上田、松井、室田、斎藤、野原、野々内、以上出席
国民儀礼の後、幹事野々内より年頭の御祝詞を申上、先生より懇篤なる御挨拶並に御訓辞を頂く。乾盃。奉献展に就て種々打合せをなし、三時過散会。

一月三日 午前九時、奉献展作品陳列の為、大丸七階会場に集る。

加藤、鍛冶、室田、斎藤、田中、野原、由里本、増田、野々内

先生の御作品以外は全部集り、早速配置す。会場の装飾も中々よし。大丸の井上、西村両氏、朝日新聞社の宮下氏も来らる。午前中に終り、散会す。
室田・斎藤、西山先生御宅へ年頭の御挨拶に行き、野々内、毎日新聞の山科氏を訪問す。猶昨二日に野々内、毎日新聞社の京都支局長、及京都新聞の大庭を訪問す。

一月四日 大東亜戦争必勝祈願神宮並に官弊社奉献日本画展覧会の初日なり。

珍らしく晴天、雲一つなき好天気なり。会場の南の窓より明るき光さし、よき気分なり。開場と全時に参観者ひきもきらず、何れも敬虔なる態度にて観覧せらる。

先生の御作、十時頃到着し、会場に一入生彩を放つ。十一時頃、先生も御来場遊さる。平安神宮宮司・八坂神社宮司・平安神宮奉賛会主事赤堀氏・竹内四郎氏、其他来観さる。朝日新聞社より会場の撮影に来る。終日、観衆多く二千位なり。

鍛冶、加藤、小野、室田、斎藤、野原、野々内出席す。
此後十四日迄、会場の日誌は展覧会記録に記載す。

一月十一日 午前、野々内・室田、京都府庁内大政翼賛会京都府支部を訪ね、藤田部長に面会。大阪及兵庫支部への紹介状を貰ふ。午後、野々内・室田・斎藤、先生御宅を訪ね、御令息の御病氣見舞を申上ぐ。夜、重ねて先生宅に参上、大阪・神戸展に就て、種々協議。九時半辞去。

一月十二日 午後、室田、大政翼賛会大阪府支部を訪ね、大阪展も翼賛会大阪支部と共同主催の事に決定して帰る。

一月十四日 京都展最終日 室田、加藤、野原出席。大丸と種々打合せ、且つ大阪会場の松坂屋企画課長杉山氏、及朝日新聞社宮下氏と大阪への搬入、其他に就き打合せをなす。此の日、午後四時を以つて京都に於ける大東亜戦争必勝祈願神宮並官弊社奉献日本画展、盛会裡に閉会す。

一月十二日より十日間、画家連盟勤労奉国隊として鍛冶・野々内・斎藤、某新兵機工場へ出動。新兵器製作に敢闘す。

一月十六日 鍛冶・野々内・小野・加藤・室田・斎藤・野原、大丸に集合（午前九時半）。作品を大阪に搬ぶ。加藤・鍛冶は西院迄にて引返し、室田、神戸に行き、大政翼賛会兵庫支部、及朝日新聞社神戸支局、神戸大丸等を訪ね、神戸展に付き打合せをなす。野々内、朝日新聞社本社、及毎日新聞社、大阪新聞社を訪ね、大阪展に付きての挨拶をなす。小野・斎藤・野原、松坂屋に行き、作品の陳列をなす。愈々、明十七日より廿四日迄、松坂屋に於て大阪展開催なり。

一月十七日 京都新聞社、毎日新聞京都支局、大阪新聞社京都支局、同盟通信社京都支局等へ礼状を差出し、午後、朝日新聞京都支局を訪ね、御礼の挨拶を述べ。猶、宮下氏、奇禍に遇れしにより、宅を訪ね、見舞を申述べ。
一月廿四日 大阪松坂屋に於ける展覧会終了。小野・室田出張。万端の趾片付けをなす。

一月廿九日 神戸に於ける展覧会の陳列、其他の用事にて、神戸大丸に出張す。
鍛冶・野々内・加藤・室田・斎藤出動す。

神戸大丸の宣伝部より中食の餐応を受く。野々内・室田両人にて神戸朝日支局、神戸新聞、大政翼賛会兵庫支部を歴訪し、挨拶を述べ。作品の陳列を終へ、三時過、神戸駅発、帰洛す。

一月卅日 京都画家聯盟へ海軍より寄贈依頼の色紙、塾への割当六点、加藤・小野・室田・斎藤・野原・野々内執筆、此の日納入す。

追記 大阪展終了に就ての挨拶状を松坂屋、翼賛会大阪府支部、毎日新聞、大阪新聞等へ出す。廿九日也。

二月 日 午前、新大阪大宮にて、小野・鍛冶・加藤・室田・齋藤・松井・野原・野々内集合。神戸大丸に行き、作品を持ち帰る。宮下氏の配慮により、電車も荷物の事をやかましく云はず、幸都合なり。神戸展は、会期中、敵の爆撃等の事あり、入場者少なりし様子なり。京都着、島津製作所に持参す。全所にて本月廿五日・廿六日の両日、此作品を陳列し、工具に見せる事となりし由。

二月廿四日 鍛冶・加藤、島津製作所に行き、作品陳列の指示をなす。此展観終了後に平安神宮へ搬して貫ふ様、依頼し置く。

三月 日 午前九時、先生御宅にて研究会

加藤、小野、鍛冶、齋藤、野原、野々内出席

加藤（海辺松）二曲屏風、齋藤（静物）、野原（雪景・秋溪）、以上出品。

先生より御懇切なる御批評あり。齋藤（静物）・野原（秋溪）佳作となる。両作品は美術館へ出品する事となる。

四月五日 かねて朝日新聞社宮下氏より、商船学校練習船に慰問画として京都各塾へ色紙十点宛寄贈して頂き度き事、依頼され居り、本日持参、届け置きたり。

加藤（海辺）、小野（桃）、松井（雀）、鍛冶（松）、野原（神宮）、齋藤（雀）、室田（菖蒲）、上田（松原）、野々内（仔雀、蟬）、以上十点。

四月十二日 野々内、京都府庁内大政翼賛会藤田氏・朝日新聞社京都支局長森川氏・及宮下氏を歴訪し、十八日平安神宮にて挙行の大東亜戦争必勝祈願神宮並に官幣社奉献日本画展の作品、完成したるにより、奉献式の案内を申述置く。

四月十六日 平安神宮に於ける奉献式に就て、赤堀氏と種々打合せをなす。

四月十八日 好天気、午前十時、野々内・鍛冶・齋藤、平安神宮社務所参集、午後の式典の準備をなす。赤堀氏も来られ、種々配慮さる。午後令時過より、神宮貴賓館に奉献画の陳列の準備等をなし、一時頃より、

稲荷神社 主典 原田國三郎氏

白峯神社 欄宜 近藤眞英氏

賀茂御祖神社 宮司 大関春雄氏

大政翼賛会 藤田徳松氏

八坂神社 宮司 高原美忠氏

朝日新聞社 支局長 森川舟三氏

平野神社 欄宜 岡田守忠氏

近江神社 主典 葎田眞澄氏

賀茂別雷神社 欄宜 片岡 宋氏

水無瀬神社 宮司 水無瀬忠政氏

檀原神社 主典 岡本五三夫氏

石清水八幡宮 宮司 副島知一氏

住吉神社 宮司 高松四郎氏

生國魂神社 宮司 二宮正彰氏

春日神社 宮司 大和田貞栄氏

日吉神社 宮司 寺井種長氏

松尾神社 宮司 手塚通男氏

平安神宮 宮司 寺田密次郎氏

赤堀吉三郎氏

内賞清兵衛氏

以上の人々来着せられ、先生も出席され、平安神宮神前に於て、寺田宮司祭主になられ、奉献式典挙行。春日遅々として輝き渡る中に、妙なる奏楽に始り、奉饞の儀あり。寺田宮司の祭詞奉読、先生、其他来賓の玉串奉典あり。続いて各神社代表に作品伝達終りて、式を閉ず。式後、貴賓館にて作品展観、先生より奉献の挨拶あり。春日神社宮司大和田氏より謝辞あり。茶菓を供し、歓談。三時頃より漸次散会さる。午後、室田・由里本出席。

四月十九日 翼賛会藤田氏、朝日新聞社森川氏・宮下氏、京都新聞社、大阪新聞社京都支局、毎日新聞社京都支局、同盟通信社京都支局、中部日本新聞社京都支局等へ礼状を出し、平安神宮へ挨拶に行く。

五月八日 午後二時より護国神社に於て、塾員一同の合作になる護国神社真景謹写の奉献画奉納式を執行す。田中杜司始神官奉仕、祭典執行。京都師団より松山大佐、舞鶴海軍人事務部、及京都府社寺課長西村精一氏、塾より中村先生始め塾員参列す。

廿年度記録（終戦後）

十二月十三日

室田、野原、同道ニテ西山先生・中村先生御宅へ参上。事始ノ御挨拶申上ゲ、

文展草稿相談日、不取敢当月廿五日ノミト決定。
研究会開催

廿一年度役員改選ノ件ハ、先生ヨリノ指命ニ依リ廿年度役員ノ留任ト決定ス。

役員氏名、左ノ如シ。

幹事 野々内保太郎

副幹事 室田秀太郎

会計 野原鳥聖

研究会委員 加藤美代三 以上

野々内幹事疎開帰国中ハ、室田副幹事代行ス。

十二月三十日

先生御母堂御死去ノ報ニ接ス。室田・小野・斎藤、不取敢参上。福岡君・文君モ参上サル。

三十一日

午前九時、室田・小野・斎藤、先生御宅へ参上。当日午後一時御出棺ニテ、略葬御執行サル。時節柄、御簡略ノ意ヲ以テ、先生御言葉ニ依リ、塾員全部ニ通知セズ。

廿一年度記録

一月二日

室田副幹事、先生御宅へ参上。日展(第一回相談日承ル)。本年度年頭挨拶ハ御喪中ニ付キ中止。

一月七日

午後一時、日展相談日(草稿)。

室田、野原、松井、田中、村上、増田出席。

「鉛筆書き」此の頃三月十二日迄ハ野々内幹事在京の爲め、同君記録の筈。

第一回日展 入選者氏名、左ノ如シ、

松井、村上、上田、野原、斎藤、野々内

京展 入選者氏名、左ノ如シ、

野々内、斎藤、加藤(無鑑査)

三月十二日

午後一時ヨリ、先生御宅ニテ研究会開催。

出席者 加藤、中本、松井、室田、上田、村上、野原、田中、以上八名。

田中君(女の顔) 優作トナル。

次回ヨリ研究会ノ形式ヲ更メ、前ノ様ニ塾員の互評ヲナシ、活発ニ花々シク、熱ヲ入レルコトトス。午後四時解散。

四月研究会ハ市展ノ為メ中止。

五月十三日 研究会

先生御宅ニテ開催。

出席者 松井、室田、斎藤、加藤、野々内、田中、小野、村上

優作「記載なし」

六月十二日

研究会

出席者 加藤、田中、上田、斎藤、小野、松井、室田、村上

優作(村上 舞妓)

四時半解散。

(奥村 一郎)

翻刻『塾員による塾展記録とスクラップ』——一九三七—一九三九年——

【塾展記録本文①、便箋貼り込み】

「一九三七年」一月二十五日 座談会

大阪松坂屋美術部より「今春、新館増築に際し種々催物を計画申すも、此際、塾に於ても展覧会様式のもの開催されては如何か」との提案あり。右の話を先生より席上に於て発表さる。塾員も一同、此機会を利用し、かねての大阪進出を実現せんものと開催の事に決議せり。先生より同店へ照会して戴く事となる。

二月一日 研究会

四月上旬、松坂屋に於て催す事に決定せる旨、先生より御話ある。先生より売却を第二義的にして作品本意を強調し、大作ならずとも三、四尺程度にて充分努力の優作を出品する様、特に御注意ありたり。

二月四日

松坂屋へ塾試作展の開催に就きて塾を代表して小野君を挨拶に赴かしむ。

二月十三日 研究会

会期は四月一日より七日迄と決定せる由、松坂屋より通知あり。中村大三郎画塾第一回試作展覧会と名称されたり。申込書を松坂屋へ提出する

事とし、^{とりあつか}不敢取、展覽会当番として小野・鍛冶・市原・会津・福岡・野々内以上六名、此ノ掌に当る事となる。塾員の出品準備も漸く高まり本日より作品下図の相談、左の通り。

鍛冶・高岡・小野・上田・松井・野々内

同日、出品の研究會作品（田園風景五点、南家作）は好評にて試作展出陳に決定す。

二月十四日

書留郵便にて松坂屋へ展覽會申込書を発送す。

二月二十七日 座談會及、下絵相談日

小下図 中本「婦女」、佐々木「溪流」、小野「鳩」

草稿 加藤「風景」、上田「風景」、市原「風景」、松井「流れ」、

川島「雪景」「海岸」、野々内「叢」、以上。

三月六日 下絵相談日

会津「風景」「ラクダ」、高岡「風景」、田中「婦女」、南家「風景」、

福岡「娘」、外、小野・市原・佐々木・野々内。

三月九日

小野君より展覽會会場を下見し会場光線壁面等面白からざる由通信あり。

直に先生に御報告す。先生より改めて御検分下さる様、申されたり。

三月二十日 試作展準備集會

下絵の相談後、本日、先生松坂屋会場を親く御検分下され、開催に付き同店と打合せ下さる。「会場は中々宜し」との事にて予ての不安を一掃す。

塾員各目の事務担当を定む。

案内状係 室田・福岡・上田・田中

写真係 久山（伊藤写真店に依頼）

新聞社挨拶 会津・中本・野々内

案内状文案 佐々木

会場出席当番は後日定むる事。

塾より案内状発送は京阪の無鑑査級、京阪各新聞社・雑誌社、東京有力新聞及・美術雑誌社、塾後援會々員等にて、其の數約九百通となり、注文する事とす。諸般の準備、相談に深更迄となり、午前二時、漸く先生御宅より自動車を戴き、散會す。

三月二十一日

会津・中本・野々内三人にて大朝・大毎・京日・日出・京華・みやこ・

同盟通信の各社へ今回の塾展に付き挨拶に廻る。

三月二十三日

出陳仮目録を松坂屋へ送る。同時に京都の各新聞社の方へも郵送す。

三月二十六日

会場の陳列壁面の都合によりスケッチ等の出品も面白からんと、先生意の御話により、此の事、塾員一同へ通知す。

三月三十一日 搬入陳列日

午前九時迄に塾員各自、作品を梅小路、合同運送店に持参し、トラック

二輛にて松坂屋へ運搬。正午到着、六階会場へ運び込み荷解す。

大阪の塾員作品と合し四十数点となり、先生午後二時頃御來場、陳列の

御指示を仰ぐ、四時頃より先生に野々内従ひて、大朝・大毎兩社へ展覽

會の挨拶に行く。会津・佐々木は時事・大阪夕刊・関西中央・関西日報

へ行く。帰來、再び作品陳列に大童となり、十時頃、漸く終る。陳列棚

の照明裝飾等の新設備と調和よし。陳列の模様は予想以上に成功なり。

四月一日 展覽會第一日、午前九時開場

先生の御作品「春」午後三時頃、先生に御同道佐々木・福岡持参、陳列す。

第一日より玉作御出陳を得、會場の生彩、頓に加里、場内の衆目これに

集り、本展の声価を愈々高め、塾員一同感激す。午前中より來觀の新聞社・

雑誌社の批評家を始め一般來觀者は何れも「從來、大阪に於る塾展とは

其の質を異にし、真摯なる態度の力作多く、熱意の場内に漲れるは好感

を与ふ」と評せり。午後は一般來觀者相つき盛會なり。七時閉場後、南

海高島屋七階食堂にて先生より塾員一同へ夕餐の厚遇に与り、散會す。

主なる來觀者 大阪朝報—富樫氏。大阪時事—加藤氏。美術と趣味—高

山氏。塔影—大森氏。美術界—加紙氏。

塾員出席者 小野・田中・市原・鍛冶・佐々木・福岡・上田・南家・川島・

中本・松井・高岡・野々内、以上十三名。

四月二日 第二日

午前中より來觀者多く終日賑ふ。堂本先生より「御盛會を祝します」の御祝電に接し、先生より返電ある。

主なる來觀者 猪飼嘯谷先生、其の他。

各新聞社へ先生の御作品写真発送す。此の日、下記四点売約となる。会

津「梅と蛤」・「赤い屋根」、野々内「秋」、上田「郊外風景」。

先生正午頃御出席。

塾員出席者 佐々木・田中・小野・野々内・中本・福岡・鍛冶、以上八名。
四月三日 第三日

神武天皇祭にて且つ天気晴朗、朝より来観者多し。夜間九時迄開場。大阪時事、記事掲載。

主なる来観者 小合友之助氏。

塾員出席者 市原・田中・佐々木・高岡・小野・久山・野々内、以上七名。

四月四日 第四日

午後、先生御出席。

主なる来観者 京都日日辻本氏。塔影大森氏。中村道太郎先生。

塾員出席者 福岡・南家・加藤・小野・室田・市原・鍛冶・高岡、以上八名。

四月五日 第五日

終日来観者多数なり。

主なる来観者 石崎先生令息同伴、同盟通信吉崎氏、都市と芸術新田氏、その他、菊池塾・早苗会塾員等、来観多し。

塾員出席者 川島・小野・中本・福岡・市原・室田・加藤、以上七名。

四月六日 第六日

午前中より来観多し。関西中央新聞に記事掲載。

主なる来観者 伏原春芳堂氏、土井撰美堂氏、佐藤梅軒氏、勝田哲氏、大阪朝報 富樫氏、石田放光堂、塔影―神崎氏、阿々土―崎川氏、画室―

山本氏、金島桂華先生、中村貞以氏、保間素堂氏、その他、菊池塾・西村塾員多数来観。

塾員出席者 松井・会津・野々内・上田・小野・市原・石田・鍛冶、以上八名。

四月七日 最終日

主なる来観者 福田恵一先生、竹内四郎氏、上村松園先生、上村松篁先生、山口華楊先生、矢野橋村先生。

西山先生令嬢御同伴。先生は奥様御同道御出席。最終日にて画家の来観、非常に多し。

南家作品風景一点、奨励の御好意を以て西山先生より特に御買上げを賜る。塾員出席者 福岡・久山・会津・野々内・松井・小野・高岡・上田・加藤・

市原・室田、十一名。

午後六時、七日間の試作展を大成功裡に閉会。早速作品を片付け、大阪の作品は搬出し、京都の分は一階まで下し、九日、合同運送より受取に行く事とし八時頃散会す。

四月八日

先生より召集を受け会津・佐々木・野々内、午前中より御宅に集り、塾展作品写真を東京の各新聞社・美術雑誌社へ発送す。

四月十日 塾展批評会、午後六時より

会津・中本・佐々木・小野・高岡・加藤・福岡・上田・市原・松井・南家・室田・野々内、十四名出席。

先生より展覧会総評を承り、各自も憾想を述べたり。後、先生より個々の作品に就ても御懇切なる御批評を賜り、得る処、多大なり。

風景A・B・C 南家有吉(奨励賞)

右決定す。

此の日、野々内、松坂屋へ先生より塾展係の女店員への贈物、及展覧会写真帖を持参し、斎藤主任に面会、御礼を述べ。

以上

編輯者

佐々木啓陽

野々内保太郎

(福田道宏)

【スクラップ①、便箋貼り込み】

A 〔芸術新聞 三月廿七日〕

中村大三郎画塾試作展

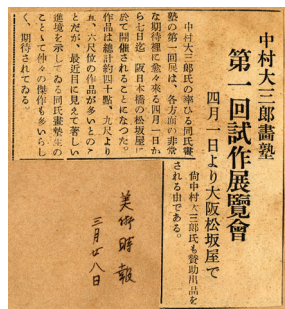
中村大三郎画塾では第一回の試作展を四月一日より七日迄大阪日本橋松坂屋で開催すること、なつた。同展には中村大三郎画伯も賛助

出品する。塾員一同初の展覧会として非常に張り切つてゐる。

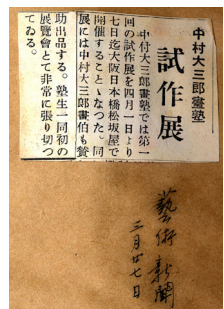
B 〔美術時報 三月廿八日〕

中村大三郎画塾 第一回試作展覧会 四月一日より大阪松坂屋で

中村大三郎氏の率ひる同氏画塾の第一回展は、各方面の非常な期待裡に愈々来る四月一日から七日迄 〔天〕 阪日本橋の松坂屋に於て開催さ



B



A

れることになった。作品は総計約四十点、九尺より五、六尺位の作品が多いとのことだが、最近目に見えて著しい進境を示してゐる同氏画塾生のこと、て仲々の傑作も多いらしく、期待されてゐる

尚中村大三郎氏も賛助出品をされる由である

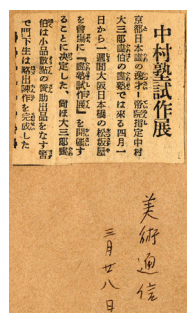
C 〈美術通信 三月廿八日〉
中村塾試作展

京都日本画の逸才—帝院指定中村大三郎画伯の画塾では来る四月一日から一週間大阪日本橋の松坂屋を会場に「画塾試作展」を開催することに決定した。尚ほ大三郎画伯は小品数点の賛助出品をなす筈で門下生は略出陳作を完成した

D 〈関西日報 四月五日〉
美術 中村大三郎塾試作展

◇…大阪松坂屋にて公開

中村大三郎画塾第一回試作展覧会が去る一日から来る七日まで大阪日本橋松坂屋画廊で開かれて居る。「場所の関係から壁面が広いため大作も相当あつて、試作」としては豪華なものである。作家に就て作品を見ると石田与一氏の『女』は線から全体の調子に浮世絵の気分が濃厚で中村塾としては稍異彩を見せ市原稔氏『奈良の山』洋風のところもあるが二曲片双で非常な努力振り『浅春』この人の力を見せて居る。小野踏青氏『伝書鳩』八羽の鳩が類型的でなく、夫々姿から羽色まで工夫されケレンなところがなく真面目に描かれて居り深さのある立派な作だ。鍛冶照応氏の『公園』は新しい規ひ



C



D

どころを持つてゐるが、筆はまだまだ若い。日本画の基本練習をもつとやつてからこの方面に転出して遅くあるまい。加藤美代三氏の諸作も同様だ。只『九月の霞沢岳』は大作として努力のほどを思はさせられた。川島洞氏の『東尋坊風景』は日本絵具であまり上手でない洋画を描いたに過ぎない。高岡徳夫氏『海』の淡い調子がよい『池のある風景』も先づ無難だ。田中久義氏の『春装』コスチュームとして味のある美しいものだ。中本英夫氏の『桃割』線の調子が少しキツイ。真面目な努力は買ふべきだ。「南家有吉氏『衣笠風景』佳作『風景A・B・C』スケッチ風な面白さがある。室田秀太郎氏『金魚』は上手だ。「郊外早春』も感じは出てる。上田道三氏『郊外風景』の古い家はよく描けてゐる。「野々内保太郎氏『霜晨』は本格的な作で『秋苑』は稍余韻に乏しいが可成りの出来だ。増田光子氏『ランプ』は細かい美しい筆で綺麗な。松井和雄氏『春溪』の大和絵調で石を洗ふ水が甚だよい出来だ。福岡玉僊氏『友禅板場』の非常な努力振りで『昼下り』もよい。「会津勝巳氏『鯉』が最も味はひ深い『梅と蛤』も古い手法だがよい作で、「佐々木喬氏二作ながら本格的だ『ながれ』『白木蘭』いづれも佳品だ。由里本景子氏は手際の綺麗な作で『制服の少女』は殊によい。久山正義氏の『野』枯寂な野末の感じが甚だよく出てゐる。傑作と云へよう。中村大三郎氏の賛助出品は『春』のコスチュームの女の後姿である。気品の高い中村氏独特の美しいものだった。

E 〈京都日日新聞 四月六日〉
デパートに珍しい宛ら本格展
大三郎画塾展を観る

◇…中村大三郎画塾の試作展が、七日まで大阪松坂屋に開かれてゐる、デパートに於ける

此種展覧には多く制作本位といふよりも、デパートそのもの、ための展覧、いはゞ芸術の商品化であるがこの試作展は多少方向をかへてゐる、尤も単なる鑑賞者向きのものもあるが、大部分はひた向きの制作であつて、かうした騒がしい場所に陳列するには不向きとさへ思へる、この仮美術館かそこらへ持つて行けば立派な絵画展である

◇…一面松坂屋美術部のコケラ落しに、か



E

うした高踏的な展観をもつて来たことに敬意を表しておく、京都あたりの百貨店も、この種展観のために、ドシドシ会場を提供されたものである

◆…サテ作品であるが、大三郎氏は珍しく展観第一日から会場に作品『春』を出品した、春虹会の古典美女に反して、これは洋装である、帽子の色がよい、服の強い線も珍しく、匆々の作といふが、近來の快作である

◆…由里本景子氏の二点のうちでは制服の少女がよい、今少しあた、かみがあれば申し分はないのだが甘いよりは見ごたへがする

◆…佐々木喬氏の『ながれ』は写真風でなく色調も悪くない、此調子を握りさげて行けば、もつと迫力を示せると思ふ

◆…会津勝巳氏の四点では『赤い屋根』が小品ながら好ましいものである『鯉』は大作、『罌粟』と同じく明るい作である

◆…福岡玉僊氏の『友禅板場』はこの人の長をよく見せてゐる、野々内保太郎氏の『霜晨』久山正義氏の『野』共に調子の淡い芸のこまかい作である

◆…南家有吉氏の『衣笠風景』は構図に面白さがみられる。「高岡徳夫氏の『池のある風景』は荒い線が何となく稚拙さを思はずが整つた作が多いので印象に残る、同じやうに川島洞氏の『東尋坊』外二作も力強い作だ

◆…加藤美代三氏の『九月の霞沢岳』は場内有数の大作であり力作、小野踏青氏の『伝書鳩』は可なり鳩の習性を掴んでゐる(愚白記)

「挿図」春 試作展賛助出品 中村大三郎「制服の少女 試作展 由里本景子」(福田道宏)

F 〈藝術新聞 四月十日〉
真摯な力作を並ぶ 中村塾の試作展 大三郎氏も洋装美人図出品

中村大三郎画塾の試作展が、一日から七日まで大阪松坂屋で開かれた。凡そデパートに開かれる絵画展は、商品としての絵画が多い。デパートにしても、特に大阪のやうな商業都市にあつては、絵画をマネキンとして客を呼ぶやうな殊勝な心掛けはない筈である。「結局一点でも多く売れることを希望する。」
この希望は当然作者に及ぼして、いはゆる素人向の制作をやることになるが、然し中村塾の二十氏は聊かもさうした「売る絵」の観念をも



F

たず、思ふ俣なる制作を陳列した。尤も小品に甘い作もあるにはあつたが、概して真剣な作が全会場を埋め、デパートの展観としては近來珍らしいものであつた。

大三郎氏は賛助出品の名の下に『春』と題して洋装美人図を出品してゐた。洋装婦人を背後から斜めに描いてゐるのであるが、服の薄墨みと、帽子の群青、濃いすみれ色のカザリ、古代朱の椅子、かうしたどちらかといへば渋い中に、パツと顔が桜の花のやうに美しく朗かに表出されてゐる。「大三郎氏も文字通り試作をやつて然も成功してゐた。」

会津勝巳氏は『赤い屋根』『けし』『鯉』『梅』と『蛤』の四点を出品。「鯉」は大作であるが、まだまだ工夫の余地がありさうに考へる。『けし』も同様、今一つピタリと来ないが、これと『赤い屋根』の三点ともに、明朗な作であることは好感がもてる。

加藤美代三氏は『構内所見』『九月の霞沢岳』『松』の三点を出品、前二者は大作であつて、風景画として場内の圧巻といへよう。若い作家の多くが洋風化に進んでゐる中にこの作家の如く確実に一歩一歩前進してゐることは好ましい。「川島洞氏は強い筆でグングンやつてゐる。『東尋坊風景』などよき例で、場内での尖端作である。」

南家有吉氏の『風景A・B・C』の小品にも可なりの荒さが認められたが『衣笠風景』は気のきいた構図を好もしく思つた。高岡徳夫氏は『池のある風景』『青い屋根』『海』の三点を出品、一見稚拙にみゆる筆致でウブな感じのものである。野々内保太郎氏の『霜晨』佐々木喬氏の『ながれ』その他この種の温順な風景、風景的花鳥も可なりあつたが人物を扱ふ作家が意外に少いのが妙である。「石田与一氏』女』田中久義氏』春装』中本英夫氏』桃割れ』増田光子氏』トランプ』由里本景子氏』制服の少女』少女」

これだけが人物画の総てである。このうち由里本氏の制服の少女が最も印象に残つてゐる。線も確かであり、色調も整つてゐるが、難を申せば固い感じがする。光子氏のトランプは多少危ぶ気な気持がする。以上思ひ出す俣に。「(愚白)

G 〈大阪時事新報 四月三日〉
中村画塾展評 加藤紫雲

京都画壇に優勝の美を、新味独断的に美人画を以て誇る大三郎氏の画塾展が、日本橋新装松坂屋の六階会場で今四月一日から七日まで華やかにその蓋が開けられた

× ×
 京都画塾の大阪進出は、先きも三越で菊池画塾の開催を見るし、浪華画壇のためにも、愉快の次第である、いつかの折に「フルーツパーラ」の大作を出した作家や、老熟の山田信太郎氏などの作は見受けないが、総数約四十三点に、塾主大三郎氏の良い作品も本日中に並べらるゝとのこと、大きな社中展としては、余りに多人数ではなくこれは恩師の画風に片よらずに色々の画の変化があつて大きな画面に懸命な力作品も少くなかつたのは、鑑賞する者をして結構な事と思はしめた

× ×
 今その内の記憶する何分の、批評でない感想を述べて見ると加藤美代三氏の霞沢岳、久山正義氏の枯野、由里本景子女史の制服の少女、「野々内保太郎氏の秋苑、室田秀太郎氏の金魚、田中久義氏の春装、など光つて見え」、「其他に福岡玉僊氏の友禅の板場の如き、大小に可成り力強い、努力された跡の作があるのは頼もしい
 「挿図」(写真Ⅱ春装田中久義氏)

H (京華日報 四月六日)
 中村大三郎画塾 大阪松坂屋で開催 第一回試作展

中村大三郎画塾第一回試作展覧会を本月一日から七日まで大阪市日本橋松坂屋美術街画廊で開催中であるが、御大中村大三郎画伯の賛成出品(春)の力作を初め塾員努力の出品四十三点に上り好評を博してゐる。「出品塾員は左記諸氏である

石田与一、市原稔、小野踏青、「鍛」治照応、加藤美代三、川島洞、高岡徳夫、田中久義、中



H

G

本英夫、南家有吉、室田秀太郎、上田直三、野々内保太郎、増田光子、松井和雄、福岡玉僊、会津勝巳、佐々木喬、由里本景子、久山正義
 「挿図」白木蘭(中村画塾第一回試作展出品) 佐々木喬

I (関西中央新聞 四月六日)
 中村大三郎塾 第一回試作展

◇京都中村大三郎画塾の第一回試作展は一日から七日まで松坂屋六階美術街画廊で開催されてゐる

◇邦画壇の新人連が近頃とみに活発に動き出したことは、何としても慶賀すべきことで、その生新な息吹きに触れることはたとへやうもなく愉快なことである、この塾展でもその通り、まづ澆刺とした意欲の溢れてゐる点に何よりも好感が持てる、総数四十四点の中注目すべきものに順次短評を加へて見やう

◇まづ御大三郎氏の賛助作品「春」は流石に品格高く温み味の溢れたいつもながらの佳品である。師の持ち味の一面をよく備へてゐる

◇石川与一氏の「女」は師の持ち味の一面をよく備へてゐる

◇市原稔氏の二点では「浅春」が図柄も「よ」く品良く出来た。小野踏青氏の「公園」は同情は出来るが点景の人物はまづい。「伝書鳩」は努力作であり見応へがある。右端の鳩は瞬間のポーズをよく捉へてゐる。加藤美代三氏では構内所見がよく「九月の霞沢岳」は苦心の作で比較的難かしい画材をよくこなしてゐる

◇川島洞氏では「東尋坊風景」が波に少し迫力が足らぬが豪放なタッチでよく活かした。「高岡徳夫氏の作はどこか稚拙味があるが伸びる作家と思へる。三点のうちでは「池のある風景」を取る。南家有吉氏の「冬野」は場中での小品だが面白い

◇上田道三氏の作では「郊外」が良い。しかし、普請中の家をあしらつたのは多少寓意を持たせ過ぎはせぬか。野々内保太郎氏の三点何れも快よい作だが「霜晨」は秋冷の実感がよく現はれ「秋苑」も端正にして気分豊かな作である

◇福岡玉僊氏では「友禅板場」の努力作よりも「昼下り」の情感を深く湛へた



ものの方が良かった。会津勝巳氏は「鯉」に実力を見せてゐる「梅と蛤」も良い
 ◇佐々木喬氏の二点は共に優れてをり「ながれ」の確実さ「白木蘭」の典雅さに良い素質が窺はれる。「久山正義氏は一点の「野」に力を集中してをり、難しい画材をよくこなしてゐて力感に満ちてゐる。由里本景子さんの「制服の少女」は確かにしたもので将来が楽しめやう
 ◇他にこゝでは挙げなかつた作家もあるが、皆懸命に勉強してたり力強い歩みぶりを示してゐる(写真は由里本景子さんの「制服の少女」)

J 〈みやこ日報 四月七日〉

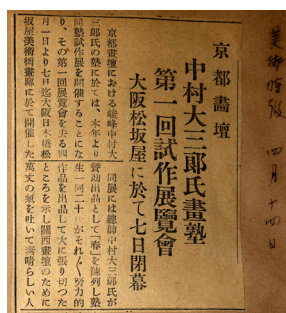
力作大作の豪華振りに 鑑賞家も驚嘆 大阪、松坂屋で公開の 中村大三郎画塾試作展

関西画壇に於ける現代美人画の巨匠中村大三郎画塾第一回試作展(註)が大坂に進出、本月一日から七日まで日本橋松坂屋美術部会場で開催の事は屢報の通りであるが、流石は写実を基調に繊細巧緻と筆技の^{二文字} 畜を極むる事をモットーとする大三郎画伯が、統帥の訓陶よろしきを得てゐる同画塾の而も試作展だけに相当大作もあつてその豪華振りに鑑賞家をして驚嘆せしめ、出品の大部分は悉く売約された模様である、なほ大三郎画伯が賛助出品の『春』の力作は気韻の高い同画伯独特の現代モダン女性の後姿を描いたものである。また同人小野踏青氏出品の『伝書鳩』は構図、描方、色調の朗かな感じの良いもので出品中の佳作と推賞すべきものである。(写真は中村大三郎画伯賛助出品の「春」と小野踏青氏出品の『伝書鳩』の佳作)

K 〈美術時報 四月十四日〉

京都画壇 中村大三郎氏画塾 第一回試作展 覧会 大阪松坂屋に於て七日閉幕

京都画壇における峻峰中村大三郎氏の塾に



K



J

於ては、本年より同塾試作展を開催することに
 なり、その第一回展覧会を去る四月一日より七日迄大阪日本橋松坂屋美術街画廊に於て開催した

同展には総師中村大三郎氏が賛助出品として「春」を陳列し塾生一同二十氏がそれぞれ努力的作品を出品して大に張り切つたところを示し関西画壇のために万丈の気を吐いて素晴らしい人「以下欠」

L 〈京都日日新聞 四月廿日〉

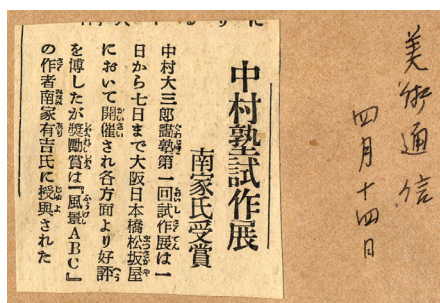
◎大阪の松坂屋で開いた中村大三郎画塾第一回試作展覧会は好評判であつた、奨励賞は南家有吉君の風景ABCに与へられた、同人姓名左の如し

石田与一、市原稔、小野踏青、鍛冶昭忠、加藤美代三、川島洞、高岡徳夫、田中久義、中本英夫、南家有吉、室田秀太郎、上田道三、野々内保太郎、増田光子、松井和雄、福岡玉僊、会津勝巳、佐々木喬、由里本景子、久山正義

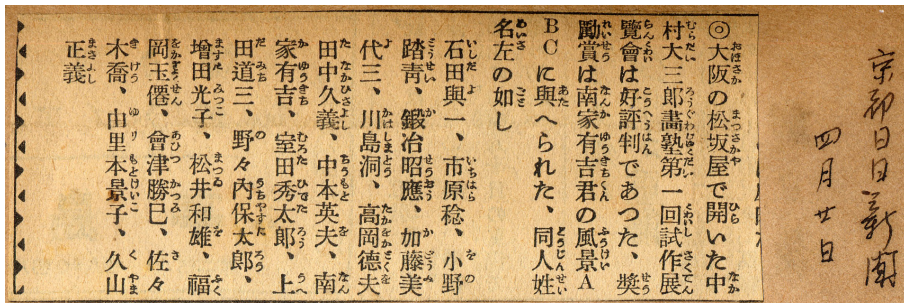
M 〈美術通信 四月十四日〉

中村塾試作展 南家氏受賞

中村大三郎画塾第一回試作展は一日から七日まで大阪日本橋松坂屋において開催され各方面より好評を博したが奨励賞は『風景ABC』の作者南家有吉氏に授与された



M



L

N 〈関西日報 四月六日〉
 「挿図」◇春（中村塾第一回試作展賛助出品）
 中村大三郎

O 〈都日報 四月十三日〉

中村大三郎画伯 試作展受賞 南家有吉氏の風景作の三点

去る一日から七日まで大阪日本橋松坂屋で第一回試作展覧会を開いた既報の中村大三郎画塾では、この試作展の出品作について研究審査の結果南家有吉氏の出品『風景A・B・C』に奨励賞を授与した

P 〈日出新聞 四月六日〉

「挿図二点」

Q 〈藝術新聞 四月十日〉

「挿図」春 中村大三郎（中村塾展）

R 〈京都日日新聞 四月八日〉

「挿図」郊外早春 室田秀太郎

S 〈京華日報 四月六日〉

「挿図」◆春◆ 塾展賛助出品 中村大三郎

T 〈みやこ日報 三月廿八日〉

美術・工芸

中村大三郎画塾 第一回試作展 四月一日〜七日 出陳目録決る

京都画壇の画塾中に新進気鋭の少壮作家を以て将来を期待されてゐる、中村大三郎画塾の第一回試作展覧会が来る四月一日から七日まで大阪日本橋に新装の松坂屋六階で統師大三郎



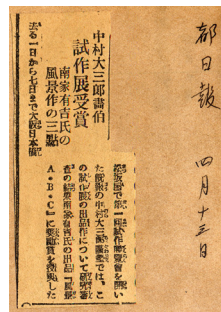
R



Q



P



O



N

画伯の賛助出品とともに約四十点を陳べて開催の事は既報の如くであるが作家の出画頭は左の如く決定発表を見た

▲女（石田与一）▲浅春、奈良の山（市原稔）▲伝書鳩（小野踏青）▲公園（鍛冶照応）▲構内所見、松、九月の霞沢岳（加藤美代三）▲山の川、東尋坊風景（川島洞）▲池のある風景、海（高岡徳夫）▲春装（田中久義）▲桃割れ（中本英夫）▲衣笠風景、冬野、風景A、B、C（南家有吉）▲郊外風景、金魚（室田秀太郎）▲郊外、醒ヶ井の宿（上田道三）▲霜晨、秋苑（野々内保太郎）▲トラウプ（増田光子）▲春溪、風景（松井和雄）▲娘、昼下り、友禅板場（福岡玉僊）▲赤い屋根、鯉（会津勝巳）▲ながれ、白木蘭（佐々木喬）▲制服の少女、少女（由里本景子）▲野（久山正義）▲賛助出品▲春（中村大三郎）

U 〈日出新聞 四月七日〉

「挿図」春（塾展出品）中村大三郎氏

V 〈京華日報 五月十八日〉

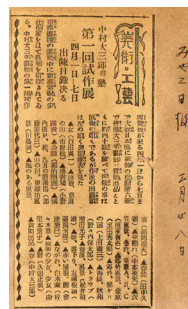
「挿図 春 一点」



V



U



T



S

【塾展記録②、別紙「中村大三郎第一回試作展覧会案内状」貼り込み】
拝啓

春暖之候愈々御清穆奉賀上候陳者当画塾第一回試作展覧会開催可致候間何卒御
清鑒之栄を賜り度御案内申上候

敬具

日時 自四月一日 至四月七日
場所 大阪日本橋 松阪屋
昭和十二年三月 日

中村大三郎画塾

【封筒裏】
京都市右京区嵯峨野有栖川町

中村大三郎画塾

【塾展記録②、別紙「中村大三郎第一回試作展覧会出品目録」貼り込み】

中村大三郎画塾 第一回試作展覧会

於 大阪 日本橋 松坂屋 美術街画廊
会期 四月一日より七日まで

女 石田與一

郊外
郊外風景
醒ヶ井の宿

上田道三

浅春 市原 稔
奈良の山

霜晨

野々内保太郎

伝書鳩 小野踏青

秋
秋苑

公園 鍛冶照心

トランプ

増田光子

構内所見

春溪

松 加藤美代三

九月の霞沢岳

静物
風景

松井和雄

雪の川
東尋坊風景

川島 洞

志摩風景

池のある風景
青い屋根
海

高岡徳夫

春装

田中久義

桃割れ

中本英夫

衣笠風景

南家有吉

冬野

風景A・B・C

郊外早春

室田秀太郎

金魚

室田秀太郎

郊外

郊外風景
醒ヶ井の宿

霜晨

秋
秋苑

トランプ

春溪

静物
風景

娘
昼下り
友禅板場

福岡玉僊

赤い屋根

会津勝巳

罌粟

梅と蛤

ながれ

佐々木 喬

白木蘭

制服の少女

由里本景子

少女

野

久山正義

賛助出品

春

中村大三郎

(奥村一郎)

【塾展記録本文②、便箋貼り込み】

一九三七年十一月十四日

先生御宅にて前現幹事会合の上、第二回試作展を大阪松坂屋にて明春四月頃開催に決定す。

十二月十三日

会期

第一希望

四月一日より七日迄

第二希望

四月九日より十五日迄

第三希望

三月中旬か下旬

右条件を付帯して松坂屋へ野々内・小野より申し込む事とす。

一九三八年一月二十九日

松坂屋試作展

三月十九日

招待日

三月廿日

自三月二十一日

至三月三十日

一般公開

右を塾にて一同に発表し、会期中、会場出席当番等決定す。

尚、松坂屋搬入三月九日午後一時、合同運送店に各自持来る事とし、雨天の場合は十日に延期する事と予定して各自に通知せり。尚、本日各自持参の昨秋末の研究會作品は大体殆ど出品に決し、来月十三日研究會出品のもと合して約五拾余点出陳の予定にて、此の旨、小野より松坂屋へ報知す。大略一定の白額をつける事になり、是には竹原及他にて値段交渉する事と成る。

二月十三日

本日の研究会の作品を以て作品大体出揃ひ、竹原に一定の様式を依頼す。

二月二十五日

試作展も漸く切迫し、外に大塾展も引続く事と一層の緊張味を帯ぶ。

東京美術雜誌社、京都・大阪各新聞社、其他地方等五十余社へ試作展開催の予告通知を出す。

三月五日 午後六時より

先生御宅へ塾員集合の上、要談す。

案内状は合計一千枚として松木印刷店へ佐々木より注文する事となる。

三月六日

試作展出品目録作製の上、松坂屋へ發送す。合同運送店へ来る九日、大阪へ搬入の件につき打合せ。

三月十二日

写真は本年度は塾展に主力を注ぐ為、各自優作以外は一点宛写して拾枚宛焼付の上、それごとく配送する事とし注文す。松坂屋にて作製の目録未だ塾へ送付無き為、新聞・雜誌社への案内状の發送を見合せ。

三月十五日

先生より電話あり、松坂屋の目録送付なき故、プリントにて仮目録製作して同封の上、新聞社等訪問する様との御下命あり。午頃出来、大朝・大毎・京日・日出・同盟社に行く。野々内より各方面へ發送の仮目録も届けたり。

先生より試作展案内状不足にて百五十枚追加御注文あり。増刷中のもの出来、直に御届けす。東京外地方新聞・雑誌社宛、前日来準備中の試作展・塾展案内状を本日発送せり。

三月十六日

夜、先生御宅へ伺ひ、昨日の塾務を御報告す。

三月十七日 陳列日

早朝、小合氏へ塾展ポスター図案御願ひに行き、一旦帰宅の上、会津君を誘ひ、先生御宅へ伺ひ御作品をお預りして便利堂に行く。写真撮影後、直ちに新京阪にて大阪松坂屋に趣く。会場には既に出席当番の塾員集り、大略陳列に取かゝる。先生、午後三時頃御来場の上、予想以上早々陳列終了。長堀大市にて御馳走になる。

当日出席者 野々内・会津・佐々木・高岡・小野・鍛冶、以上六名

三月十八日

早朝、再び小合氏へ行きしも昨夜来小合氏方に急用の為、下図案未成との事に無為に帰り、学校に先生と御面会す。それより便利堂へ行き、福岡より大阪の新聞社宛案内状を認め、別に京都市内各社へ福岡・野々内の曆訪すべき先生御作品其他の写真を整理して直ちに御待ち受けの先生を大丸前に急行して御写真をお目につけ、万端手筈をと、のへ、福岡・野々内を誘ひて市中五社に。佐々木は大阪に行き朝日ビル前に待ち合せ中の小野と落ち合ひ、大阪朝日・大阪毎日・関西日報・関西中央・大阪時事・夕刊大阪各新聞社を曆訪す。記者不在の社に対しては別に手紙を付して案内挨拶状を出す。

尚、開会一日に大正日日新聞社玉井主事、大坂新聞社野澤春葉氏〔三〕も速達にて挨拶状と共に写真送る。

三月十九日 招待日第一日 晴

小野・佐々木・福岡出席

先生早朝ヨリ御出席あり。今回は作品全部洋額式、白一色の装飾にて会場の空気明朗・新鮮の気溢り、日本室には先生立雛を陳列し、昨年度土産品陳列部は本年は作品の陳列と共に休憩室を設備しあり、先生御作品「春」の外に素描の小品を別床に陳列出来たるは、会場更に錦を添へ、場内の明細彩をいやが上にも増したるは塾員一同感激の外なし。床上処々の瓶花も作品と調和よく、風情を添えたり。

大阪朝報 富樫木人氏来観。

大阪時事 加藤紫雲氏来観。

大阪日報 野津春葉氏塾展写真発送。

大正日日社 玉井主事塾展写真発送。

夕刊大阪宛 先生御写真送る。

堂本印象先生ヨリ御祝電あり、返電。

円城留三郎氏来場。左記作品売却あり。

小野(山)、加藤(山)、中本(舞妓)、上田(風上ゲ)、佐々木(おそ秋)、

福岡(朝)、久山(鷹)。

外に松坂屋美術部にて松井(晩秋)売却。閉会后、先生御作品「春」・「素描」の写真撮影の為、福岡・佐々木持参して先生と御同道帰京、便利堂へ行き、撮影して福岡君宅に御作品携行、明朝迄御預りす。会津作品尺八、二点を別に注文ありたり。

三月廿日 招待日第二日 晴

会津・福岡・野々内・久山・佐々木出席

美術と趣味 高山氏来観、写真一揃渡す。

画室 山本広洋氏来観、写真渡す。

大毎美術 斎藤憲太郎氏来観、写真渡す。

塔影 大森氏来観、写真渡す。

会津(冬)・加藤(山A) 奨励賞に決定。

昨日円城留三郎様七点御売約の芳情に京都嘯月の菓子箱を持参して、塾より佐々木御礼に行く。

招待日は一般観覧者の入場を拒絶せる為、入場者少きも、遠来の来観者多く、作年〔四〕に比し一層の緊張したると寸法の略々一致し、画格の向上、著しきに好評を博したり。此にて大阪のみにて他に公開せざるは惜しき様に来観者よりの讃辞をうけたるは塾員として喜びに堪へず。

三月廿一日 公開第一日 晴後雨

鍛冶・久山出席

先生の御作の八ツ切写真及素描の中版型写真出来、福岡より使者持来、会場に届けらる。早速受付ニテ販売す。先生より三時頃会場に御電話あり、会場の模様等御尋ねあり。朝より三々五々観覧者あり。十一時より午后四時頃迄ハ雑踏す。別に先生より佐々木へ御電話あり。試作展の事務につき今一応御示指〔五〕を仰ぐべく、直ちに御伺す。

三月廿二日 公開第二日

加藤・上田出席、早朝、臨時に佐々木、会場に出席す。
東京 美術通信、同盟通信、吉崎氏、下店氏、神崎氏、福井佐太郎氏、徳美松太郎氏、辰巳吉次氏、都市と芸術新田氏、吉副禎三氏、塔影 大森氏、写真及手紙発送す。

斎田元二郎氏（塔影社）、美国石川氏手紙出す。
画室 山本氏に写真デッサン及賞発送す。
美術と趣味 高山氏にも同様、発送す。

大阪時事新報、及関西中央新聞廿二日付夕刊に試作展記事大きくのる。
大阪時事・関西中央へ記事掲載紙一部宛送付方、依頼願状出す。
大正日日 玉井氏来観あり。

本日、比較的来観者尠シ。
三月廿三日 雨 公開第三日

中本・加藤出席
雨天のため午前中観覧者尠し。
午後、京都日日 古山順一氏来観。

前田荻邨氏、徳岡神泉氏・御令室・御令嬢御同伴。
山口華楊・田口青晃氏来観。

他に研究科生徒四、五名。
新聞記事なし。

三月廿四日 雨 公開第四日
田中・中本出席

本日も午前中は参観者、割に尠し。
関西中央 黒田氏より廿二日付夕刊、廿四日付夕刊一部宛送らる。

二十三日及廿四日朝刊大阪時事に記事あり。
午後、先生御宅にて佐々木氏より電話あり。

四時以後割に人出あり。
新田章童（都市と芸術）、勝田哲、桜井義臣（大朝）三氏来観。

京都にては先生御宅より会場中本へ電話して今夜帰途会場より塾備用品簿・写真・目録等持参して先生の御宅へ寄る様依頼し、佐々木は更に不足分を焼増すべく伊藤へ注文す。

夜、先生御宅にて中本・田中と会合し、会場の模様を聞く。上田へ明朝、会場より残余写真急送方依頼す。

三月廿五日 晴、時々雨 公開第五日

上田・室田出席
賞及塾作品写真、全部佐々木へ速達ニテ発送す。

京都日日新聞朝刊に記事大きくのる。
金島桂華先生来観。

本日、来観者午前中尠く、午後は普通なり。
三月廿六日 晴 公開第六日

川島・南家出席

案本一洋先生来観、西村卓三氏、佐藤光華氏来観。加藤美代三作（山の外のもの）追加注文あり。
三月廿七日 公開第七日 最終日

松井・鍛冶・小野・福岡出席
先生、四時頃会場に御出席。

上村松園先生、上村松篁先生来観。
山本紅雲氏、西村先生塾員多数来観あり。

日曜日にて午後より多数来観あり。
この日、京都にては合同運送店へ電話して試作展作品の搬出を依頼す。

三月廿九日
松坂屋へ本日合同運送、作品を受取りに行きし筈。別に松坂屋に売上代

金受取方法につき京都より電話す。
四月一日

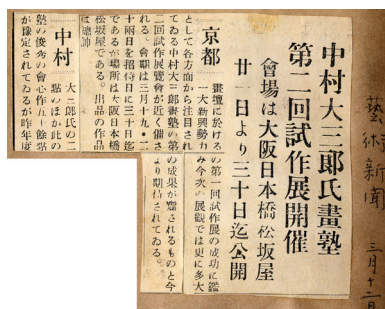
松坂屋京都仕入部中村作太郎氏来訪。売上代金領収す。
（福田道宏）

【スクラップ②、便箋貼り込み】

A 〈芸術新聞 三月十二日〉
中村大三郎氏画塾 第二回試作展開催

会場は大阪日本橋松坂屋 廿一日より三十日迄公開

京都画壇に於ける一大新興勢力として各方面から注目されてゐる中村大三郎画塾の第二回試作展覧会が近く催される。会期は三月十九二十両日を招待日に三十日迄であるが場

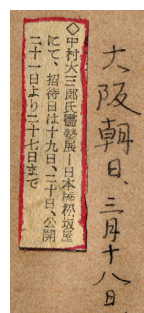


A

所は大阪日本橋松坂屋である。出品の作品は絵師中村大三郎氏の二点のほか此の塾の俊秀の会心作五十余点が予定されてゐるが昨年度の第一回試作展の成功に鑑み今次の展覧では更に多大の成果が齎されるものと今より期待されてゐる。

B 〈大阪朝日 三月十八日〉

◇中村大三郎氏画塾展―日本橋松坂屋にて、招待日は十九日、二十日、公開二十一日より二十七日まで



B

C 〈関西日報 三月十九日〉

中村大三郎塾 大阪で展覧会



C

京都の中村大三郎塾では第二回試作展を十九日から二十七日まで大阪松坂屋で開催。中村氏の特別出品「春」二題の外、「塾員中優秀な作家十八氏、総点数四十五点を展覧する。」

D 〈関西中央新聞 三月二十四日〉

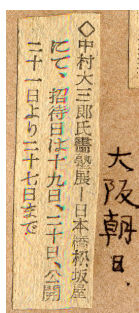
「挿図」『春』第二回中村塾試作展出品(松坂屋)



D

E 〈大阪朝日 三月十八日付 Bと同じか〉

◇中村大三郎氏画塾展―日本橋松坂屋にて、招待日は十九日、二十日、公開二十一日より二十七日まで



E

F 〈京都日日 三月一日〉

中村塾試作展 三月十九日から大阪松坂屋にて青甲社、葱青社の諸展に相次いで中村大三郎画塾の塾展は愈よ四月八日より十日迄市美術館にて塾員二十余諸氏の力作を集めて盛大に開催されることになつ

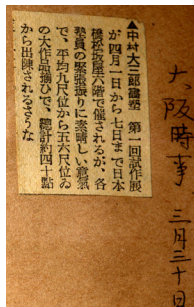
たが、これに先立つて同塾の第二回試作展が大坂日本橋松坂屋にて三月十九日、廿日を招待日、廿一日より三十日迄を一般公開(但廿八日定休日)として華々しく開催されることになつた。「これは中村大三郎画伯を始めとして会津勝巳、南家有吉、加藤美代三、久山正義、川島洞、野野内保太郎、佐々木啓陽その他塾員二十余諸氏の作品五十点ほどを集めたものであるが、いづれも二尺幅から四尺幅のものである、なほこの作品は主として昨年頃から研究会の優作である、四月の塾展制作も最早着々として進められてゐるが、これはいづれも九尺幅ほどの力作の中には六曲一双も数点あるといふ目覚ましい健闘振りであるからその開催は刮目して待望されよう



F

G 〈大阪時事 三月三十日〉

▲中村大三郎画塾 第一回試作展が四月一日から七日まで日本橋松坂屋六階で開催されるが、各塾員の緊張振りに素晴らしい意気で、平均九尺位から五六尺位の大作品揃ひで、総計約四十点から出陳されるさうな



G

H 〈掲載紙・日付不明〉

★…中村大三郎画塾第二回試作展が大坂松坂屋に開かれてゐる(会期二十七日まで) 大三郎氏の春と題する女人像の外に四十三点が出陳されてゐる

I 〈大阪時事新報 朝刊 三月廿四日〉

▼…氏は本年四十二歳を迎へて人生の血氣盛り、福田平八郎堂本印象の両氏と共に、京都三大青年画家の一人だと頗る有名にされてゐる



H・I

作家である、殊に京都画壇の王者たる師西山翠嶂氏の女婿であり、斯界の若殿様と云つた感深い氏の色彩の美麗さは丁度秋のすみきつた青空を眺める如くその得意とされる美人画に至つては、正に新一機軸を成してゐる

▼…生活の屈託など何不自由のない家柄に生まれた彼れは好める画道への精進も何んの危ぶみもなく、すら／＼と美術学校の庭で芽ばえ、即ち二十一歳の驚く可き文展初入選をふり出しに、学校卒業後には帝展第一回へ「双六」を発表して世の注目をひき、第二回では特選（静夜聞香）を獲得し第三回には（浄謚）無鑑に躍進更に第四回の特選（燈籠大臣）の大作は後世に残さる可き粹作品を出して、技倆破竹の勢ひに進むの氏はその停止する処を知らず遂に三十一歳の若盛りで画人最高の審査員を拜命する

▼…唯驚嘆恐る可き手腕家と云ふ可きである。氏の好んで創造する現代式を加味する、新大和絵然も極めて貴族的婦人の典型へと心がけるつら憎いほどの描筆は、をそらく東西の人物作家を顧みても、氏より以上の追従は許すまいと断言する

「挿図」「春」中村大三郎氏作

J 〈東京毎夕 三月十一日〉

「挿図一点」

K 〈東京毎夕 三月十一日〉

中村大三郎画伯門下生試作展

京都日本画壇新進の雄を以て将来の日本画壇に活発な歩みを示すべき期待を多大にかけられてゐる中村大三郎画伯門下生の試作展は此の春の京都塾展で注目される作品を展示したのが審査の結果加藤美代三氏の『山』Aと会津勝巳氏の『冬』に奨励賞が授与された（写真はその奨励賞作山A（中）と冬（下）と大三郎氏出品の『春』（上）である）

「挿図二点、加藤美代三「山A」・会津勝巳「冬」、なお前掲了中村大三郎《春》がこの上に掲載されてゐたもの」



J



K

L 〈大阪時事 三月二十二日〉

◇中村大三郎画塾 第二回試作展が三月二十一日より二十七日まで、日本橋松坂屋六階会場で開催されてあるが、その特別出品大三郎氏（春）の力作品は愈々氏独歩その現代美人図の描筆は優美佳境に入るの感が深い

M 〈大阪朝報 四月十五日〉

▽中村塾奨励賞 曩に日本橋松坂屋で開催の中村大三郎画塾試作展の結果、奨励賞は「風景ABC」の作者南家有吉氏に授与された

N 〈関西中央 三月二十二日〉

美術界 清新の気漲る 中村大三郎画塾試作展

◇…京都中村大三郎画塾の第二回試作展は二十一日から二十七日まで松坂屋六階美術部で開催中である。若い塾の人たちが元気一杯で種々の変化を求めてゐる点が目立ち好感が持てる

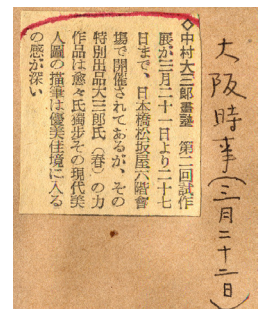
◇…師中村大三郎氏の賛助出品の「春」は現代的な美人を描いて独自の教養美が遺憾なく発揮されて愈々高い境地に進んでゐる

◇…小野踏青君は自然に真正面につかつてゐる態度がよく「山」が秀れてゐる「住宅地」

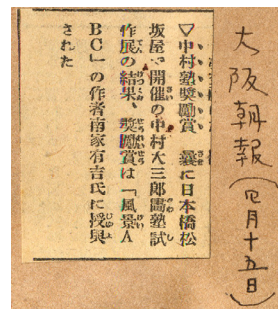
も新鮮な感があつてよい。加藤美代三君は「道」は無難な作だが「山AB」はぐんと迫る力を持つてゐる。田中久義君の「婦人像」は大変美しいがどこか弱々しい感がある

◇…南家有吉君は却々異色ある作家だ。洋画と日本画の中間味を覗つた味には却々面白いところがある「野」が最も傑出してゐる。上田道三君も同方面の味をねらつてゐるやうだがまだ内面化するまでには至つてゐない「冬」は面白い境地だが少しこたつた

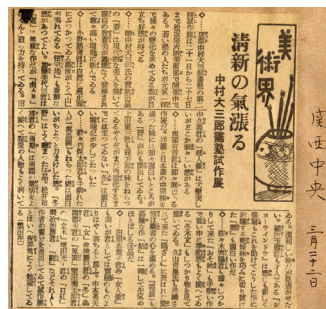
◇…野々内保太郎君も手馴れた人だ「禽鳥図」もねらつた処は面白いがちよつ



L



M



N

と力まけた感。「冬野」はよく纏まつた佳品。松井和雄君の「雨期」は雨間の景情をよく捉へて点景の人物もよく利いてゐる。温和しい絵だが見逃せない。福岡玉僊君も才人である。「シヨウウインドウ」は感じも新しく描写もこれを助けてこうした作に付随する乾燥味を巧みに切り抜けた「朝」も面白い作だ

◇…佐々木啓陽君も却々しつかりして来た「おそ秋」も手堅い作で渋い中に季節感もよく捉へてゐる「冬木立」もしつかり物を見て描いてゐる。久山青菓氏も洗練されて来た「陽ざし」に表はれた愛情は観者の心を温める。「霜晨」も高雅な作「鮎」は一転して生気のほとばしる佳品だ

◇…由里本景子君の「女人像」も美しいが君としては前回のものよりはやゝ落ちると思ふ。中本英夫君「女」会津勝巳君の「冬」高岡徳夫君の「風景」室田秀太郎君の「立木」増田光子君の「口紅」鍛冶照応君の「庭」などそれぞれ作者の領分を表出してゐて試作展とはいへ皆非常によく勉強してゐる(黒田生)

○〈関西日報 三月廿三日〉

中村大三郎塾試作展 十九氏の作品を大阪で公開

目下日本橋松坂屋で中村大三郎画塾年次第二回の試作展が開かれて居る。中村塾必ずしも美人画ばかりでなく今年には風景画が特に多い傾向は堂本塾などよりも流石に日本画を深く意識してゐるためか奇抜な作はなかつた。作家に就てこれを見ると小野踏青氏では『住宅地』が気分の新しいもの『丘』『山』いづれも洋画風ではあるがシツクリ落ちついた気持よい作だ。鍛冶照応氏では『庭』が佳作だ。低い土塀の内と外が非常によく纏まつて描かれて居る。加藤美代三氏の『山』は奨励賞を得たもの、版画を感じもあるが、含蓄のある単純な色調の蔭にこの人の深い力が感じられる。『薄暮』はクラシツクな油絵風の特色を出して居る。「川島洞氏は『柘榴』の一点。紙本の着色で高踏的な静物である。田中久義氏『婦人像』は大作で線もあんまり硬くなく簡約された線に力量を充分見せて居る。「高岡徳夫氏『風景』二点中、湖畔の薄暮を思はせる作品は単純なやうだが見倦きのせぬ深さがある。悪くない作品だ。中本英夫氏の婦人像二点中『女』は現代風俗で真面目に描かれ頗る好感が持てる。南家有吉氏『大文字のある風景』は力一杯の強さの出た小品だ。『野』は



○

太陽の光を全面に反映させて美しい上品さのある風景だ、点景の牛がよく利いて居る。室田秀太郎氏『木立』はスケッチとして実に自然を深く見つめて居る。これから仕上げ技法に一工夫あれば立派になるであらう。上田道三氏では田畝を描いた『冬』が力作で『風上げ』の如き郷土風俗を見せてゐるものもナカナカ面白く出来て居る。野々内保太郎氏の『冬野』は筆も充分延びた手際のよい作。

『柿』は板の上に柿と銀杏の実のある日本的な佳品だ。増田光子氏『口紅』もしつかりした筆で堂々と描かれ破綻なく立派に纏まつて居る。松井和雄氏『雨期』草木悉く茂つた青々とした野辺の風景が気持ちよい。洋画風の『夕照』『晩秋』も典雅だ。福岡玉僊氏はスケッチの三点いづれも佳作だが『シヨウウインドウ』は特に仕上げが上手に出来て居る。会津勝巳氏では奨励賞の『冬』が花鳥画としてとても秀抜だ。筆の調子が中村氏のやうな慎重な態度で重厚に純日本画の美しさを遺憾なく現し佐々木啓陽氏では『池』の破れ蓮葉の泛ぶ前が素敵だ。『山茶花』もシツクリ落つた佳作。由里本景子氏『女人像』は美しく非の打ちどころのない立派な作。久山青菓氏では『鮎』が動的な感じの溢れる佳作、日本画風の『鷹』もよい。師匠中村大三郎氏の『春』は清麗な筆と色調で美人画としては、一頭地を抜いた秀れた作品である。(写真は会津勝巳氏『冬』の部分)

「挿図一点」

P〈大阪朝報 三月二十四日〉

中村大三郎画塾 試作展寸感 白御展の貧弱に対し これは好感の持てる内容さ

★…美術館の白御会展と時を同くして、日本橋松坂屋で開かれてゐる、京都中村大三郎画塾試作展を観たが、同じく大阪に向いて来て、前者の鬼面人を驚かす底の宣伝程もない内容の空虚さに比して、これは試作展と称してゐるもの、其の真摯な態度、制作に対する意気込みの全力的なのに、仮令小品的な試作とあつても熱情の溢れた澆刺さに好感が持て愉快に鑑賞が出来た

★…中村大三郎氏は珍しく開会日に合せて「春」といふ題で近代麗人の半身像を出してゐた、気品の高い匂ひをもつてみづ／＼しい



P

感覚を見せてゐた近頃の佳品である

★…美人を^{〔挿〕}いたものでは、増田光子、中本英夫、由里本景子、田中久義君等があつたが、増田光子さんの「口紅」の努力的で線と量感、全体の感じに申分ない程の出来で、最近進歩の跡の著しいものがある、由里本さんも相変らず力量のあるところを示してゐた、中本英夫君のものでは「女」を採る、無難に出来てゐる

★…風景画の方では、其の殆どが洋画風の表現をとつたもので、加藤美代三、南家有吉君等が其の佳作を見せてゐる、加藤君の「道」「鶏頭」などに其の追求的な熱情が見られ、南家君のでは「野」「大文字山のある風景」があつた

★…小野踏青君の「丘」の空や草原の感じはよく出来てゐたが樹木に今一步工夫あつたらよかつたのではないかと思ふ、鍛冶照応君の「吾彦山観音節分詣」の郷土色の溢れた感じが出てゐる、上田道三君も異色のある作家で童画風な無邪気さがある

★…野々内保太郎君の作では「柿」の図に其の喰ひ下つて描き上げたやうな熱情の感じられるものがある、松井和雄君の作は卓出してゐるといふのではないが難の無い粒の揃つた調子の良さに注意を払はされた

★…福岡玉僊君の着想構図に興味を惹かれた「シヨウウインドー」「朝」など未だ一寸未完成なところがあるが、期待の持たれる作家だ、会津勝巳君の「山茶花」は面白い感じを^{〔茶花〕}つてゐる、「冬」は相当画品を正しく見せて場中出色の一つであらう

★…其の他佐々木啓陽君の「冬木立」「久山青巢君の「霜晨」「鮎」などそれぞれに相当の手腕を見せてゐた(富)

Q 〈京都日日新聞 三月二十五日〉

新しき画緻 大三郎塾展を観る

★…大体に風景画が多く次いで花鳥、人物と順を追つて減少してゐて、作風からいふと加藤美代三、南家有吉氏らの近代風な描法のもの佐々木啓陽、室田秀太郎氏らが進んでゐる風なのと別れてゐる

★…花鳥では会津勝巳氏が温健な作風を示してゐるやうである、賦彩の明るく華やかなのに福岡玉僊、上田道三両氏がある



Q

★…静物では川島洞氏の柘榴があるが、これは会津氏あたりとスツカリ行き方が違つてゐて若々しいものをもつてゐる

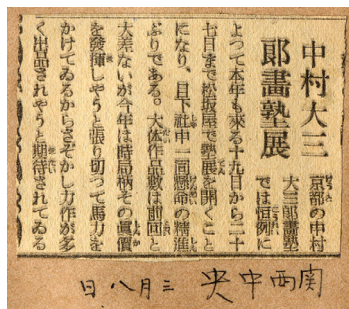
★…人物では中本英夫、由里本景子両氏が目に立つ、田中氏のは^{〔ポーズ〕}ボーズの関係が変に堅くるしく、増田氏は今少し裸像のデッサンが必要でないかと考へる

★…中村大三郎氏の「春」は昨年の市展に出品されたのと同じやうなもので、寧ろ素描の方に親しみ深いものを感じた

★…なほ奨励賞は会津勝巳氏の冬と加藤美代三氏の山に授与された(愚白) 写真奨励賞の「冬」会津勝巳(上)と「山」加藤美代三
〔挿図二点〕

R 〈関西中央 三月八日〉

中村大三郎画塾展 京都の中村大三郎画塾では恒例によつて本年も来る十九日から二十七日まで松坂屋で塾展を開くことになり、目下社中一同懸命の精進ぶりである。大体作品数は前回と大差ないが今年は時局柄その真価を發揮しやうと張り切つて馬力をかけてゐるからさぞかし力作が多く出品されやうと期待されてゐる



R

(川上真由子)

【塾展記録本文③、便箋貼り込み】

「一九三七年」十一月十四日

先生御宅にて前・現幹事会合の上、第二回塾展を明春四、五月頃開催の事に決す。

十二月十四日

京都市美術館に会津出頭して下記通りの会場借用申込たり。

明春五月上旬 第一希望

五月中旬 第二希望

四月下旬 第三希望

十三年

一月二十一日

新聞紙上に京都市展五月一日より廿日迄開催に決定せる旨記事掲載あり。是によれば塾展の申込期日が抹殺された事の確実となるに及び一応美術館に交渉して其実を確め先生に御報告申上ぐ。

瀬谷教員長、西野美術館主事、先生御宅へ来訪あり。御相談の上、四月八、九、十日に決定せり。

塾展事務担当

準備・会場設備・交渉 会津、佐々木

文書係

野々内、久山

右に大別し現幹事は右諸務を統制指示する事とす。

二月十三日

本日の研究会作品を以つて大略、試作展出品作品も出揃ひたるを以つて、以後塾展の準備に鋭意邁進する事となる。下絵・草稿も来る廿一日、廿六日、三月五日を以て相談日と定めたり。

三月廿一日 下絵相談日 午後六時より

会津、野々内、加藤、小野、中本、久山、福岡、佐々木

三月廿六日 下絵相談日 午後六時より

会津、野々内、南家、田中、鍛冶、小野、松井、上田、久山、加藤、佐々木 終つて種々協議を重ね、会場前の大旗、ポスター、街頭立看板等の相談す。

三月三日

市役所社会教育係森氏、同課大本氏に面談して塾展後援の事を依頼し、承諾を得たり。併て市電車内の広告の件につき、約半額に割引を依頼せり。電車数四百五十台外新車廿台、四月より新車廿台増加にて計四百九十台と聞く。四月八、九日のみにて使用日無き為、今日中に返答する必要を生じ、六時頃、先生御宅に伺う。先生に相談の上、右両日、中央天井吊をに決定して申込む事とせり。

天井吊ポスター寸法 縦一尺二寸、横二尺五寸 片面(但旧車四百五十台)にて。一日料金 廿五円也。(新車四十台) 片面一日 四円八十銭也。右を市の後援にて半額に減額。

二日間 広告料 廿九円八十銭也。

尚、窓吊広告料 二十円

横窓セロファン 一日料金三十円

此寸法 横一尺縦一尺四寸五分、

セロファン印刷所 本局五二九四

新興セロファン取扱

三月四日

市役所大本氏電話して直に市役所に行く。大本氏、幹旋にて総務課広告係に行き、電車内天井吊広告半額割引を依頼して手続書を作製して願書を出す。絵専校に行き、ポスター印刷所市原の作年度の印刷代を調べたる処、五百枚にて廿四円との事(但本年度は物価騰貴の為高価ならんとの事)。

三月五日 下絵相談日第三日 午後六時より

会津、南家、野々内、室田、松井、加藤、小野、福岡、高岡、佐々木

草稿終つて塾展試作展準備につき種々要談あり。

美術館前掲揚の塾旗につきても論議され、正確なる大きさの見当つかず

一応専門店に見積らす事とす(一間半巾三間位にて)。

三月六日

京阪広告商事へ立看板及ポスターの件につき交渉の為、同社高岡利七氏の来宅を申入る。

三月七日

京阪広告商事より委細聞きとり、急を要したる為、会津・佐々木同道、先生御宅へ御伺し、図案につき御教示をうけ、会津、一応工風する事とす。松本印刷所へ案内状依頼す。

三月十二日 午後六時より

会津、鍛冶、久山、中本、野々内、佐々木、加藤、小野、田中、福岡、上田、南家、室田出席

種々協議す。立看板広告図案は大体、福岡持参のものに決定せるも多少修正して注文する事となる。旗も大体十五円位にて注文の事とす。

旧現幹事のみ居残り、種々最後の協議をなし、夜二時頃散会す。

三月十四日

立看板図案を福岡製作。京阪商事へ至急注文して市中要所甘ヶ所に掲出を依頼す。

東京、大阪、市内其他、新聞雑誌社へ塾展の発表をプリントにて案内を出す。尚、市内新聞社への訪問の上案内する事とせるも萬一不在の場合には別の書面を置きて趣意の徹底を期す。

三月十六日

夜、先生御宅へ佐々木御伺す。
青甲社のポスター図案が相当よき故、当塾の分も一層更に研究すべき必要ありとの御説にて、明朝小合友之助氏へ依頼に行く事となる。

三月十七日

早朝より、佐々木、小合氏宅に行き、ポスターの考案を御願す。明朝再度御伺して右図案下絵を頂戴する事を御約束して、帰途京阪広告商事へ立看板の出来を督促して尚先生へ御電話す。

三月十八日

早朝再び小合氏へ行きしも昨夜来小合氏方に急用の為、下図案未成との事にて用を果さず。

三月二十三日

美術館使用料其他、塾展の事につき御相談の為、先生に御電話す。

三月二十四日

塾展案内状封筒の印刷を取よせ、先生へ伺ふ。それより更に印刷屋に注文に行く。夜、試作展の事にて、再び先生御宅へ伺ひ美術館使用料等お受取りする。

三月二十六日

美術館使用に付、全事務所に行き、次に青甲社展覧会場にて上村先生と当塾展の準備に付、御相談す。帰って写真二十四通、手紙二十四試作展の通知を発送す。

三月二十八日

塾展会場設備に付き、会津、佐々木、山寅^ニえ赴く。不在にて打合せ不調。美術館事務所に主事西野氏を訪ひ監守、女事務員の事に付ても相談す。

青甲社展覧会場を下見して塾展の参考にす。同会場にて先生にお目にかゝる。夜、先生御宅に前幹事会合して塾展準備に付、最後の打合せをする。塾員へ激励の文を出す事とす。

三月二十九日

小合氏へ印刷の出来たポスター一枚を送り礼状を出す。

三月三十日

野々内宅、上田宅と二班に塾員文書係集合し、案内状を認む。

三月三十一日

早朝七時、先生御宅へ参上。案内状の文案を頂戴す。

四月二日

市役所に行き、市電広告料を納めに行きしも、土曜日の為、時間遅れ手続き出来ず。

四月三日 塾展出品画下見

八時頃、会場（美術館事務所）に作品揃ふ。先生、御出席の上、御批評を仰ぎ、芸艸堂の写真撮影を行ふ。残余一部の作品は搬入日に写す事になる。上村松篁先生へお電話して色々塾展参考事項をお尋ねする。名古屋、伊藤悠紀子氏作品の表装を山川へ依頼す。

四月四日

京都ホテルに七日の招待日会食の打合せして、市役所に赴き教育部長瀬谷氏に面談して美術館貴賓室借用を願出たり。庶務課に市電広告料を納める。

朝日会館に福岡と会合して新聞社雑誌社関係（大朝、大毎、日出、京日、同盟、福井、新田、下店、神崎、古山氏等）を歴訪して七日の下見内覧

会の案内をして夜、先生御宅へ伺ふ。

四月五日

先生へ御電話し御話しにより山寅へ電話し会場設備に付き打合せする。

四月六日

先生御宅に伺ひ、種々御相談して後、京都ホテルに行き、日章旗を借用す。

四月七日

陳列日 快晴

塾員及作日八時頃迄に出揃ふ。

二時陳列は終了、一旦先生御帰宅、四時頃再び来場される。

此頃既に新聞雑誌関係者続々来られる。

大毎 仙波健氏、日出 桂田栄明氏、京日 辻本和一氏、同盟 吉崎肇氏、福井 井佐太郎氏、都市と芸術 新田章童氏、其他、美術館事務所階上の市展、打合せ会に出席の各塾代表者の一部も会後来場されるあり。

瀬谷教育部長。森社会教育課長、山口華楊先生、上村松篁先生等

四月八日 公開第一日 晴天

葱青社ヨリ祝電

入場者 千三百九十六名

金島桂華先生、清水光先生、猪原大華氏、福田恵一氏、堂本印象先生、桑本一洋先生、菊池隆志氏、松本道夫氏、池田遙村氏、上村松篁先生、上村松園先生、三宅鳳白氏、榊原若山氏、古山順一氏、辻本和一氏、植田寿蔵先生、猪飼嘯谷先生、小川翠村氏、西村五雲先生、竹内四郎氏、

案本武雄氏、玉城末一氏、先生御尊父様、先生御尊母様、中村道太郎先生、竹内鳴鳳氏、堀十五郎先生、猪木貞爾氏、桂田栄明氏、美術と趣味社
高山氏、佐藤梅軒氏、日本芸術社 山本大幹氏、市学芸部長 芳川越氏、渡辺正雄氏、奥田雀草氏、精華主筆、京都日報社企画部長
到来物

西山先生ヨリ 菓子箱 (長崎屋)
青甲社ヨリ 鮎二皿
上村先生ヨリ 菓子箱 (益屋)
四月九日 第二日 晴天

入場者 千二百四十六人
柴原希象氏、山鹿清華先生、勝田哲氏、古山順一氏、清水六兵衛先生、西村卓三氏、山田江秀氏、野添平米氏、中野草雲氏、中村貞以氏、千熊章録先生、田村豊州氏、登内微笑先生、トルコ大使令息、板倉星光氏
四月十日 第三日 晴天

入場者 二千五百二十七名
川村曼舟先生、曲子光男氏、上田万秋先生、山本紅雲氏、樋口富麿氏、三輪晁勢氏、同志社教授シーアイビー氏、徳岡神泉氏、石崎光瑤先生、林文塘氏、先生御奥様、福田翠光氏、西山翠嶂先生、保間素堂氏、西山先生令嬢、竹内逸氏、徳田隣斎氏、森守明氏、澤田宗山先生、下店静一氏、田之口青晃氏、清水正太郎氏、佐藤光華氏、前田荻村氏、東京三越 桜井氏、富田精氏
三日間入場者通計 五千六百六十九名
閉会後、塾員一同、四条菊水楼上にて西山先生、先生、道太郎先生を主賓として慰労会を催す。席上、西山先生より種々御高話を承る。西山先生御退席後、別室にて展覧会について先生とも懇談を交へる。

四月十一日
朝、先生より御電話あり。神崎氏、東京より昨夜帰京され、本日塾展作品一覽致したしと依頼されしにより、其準備をする様にとのお話により、直ちに美術館え佐々木・会津、出向く。南側入口前に作品を整理し、神崎氏を迎へる。三時過までかゝり作品通覧されたり。是より、福岡・佐々木同道、円城氏宅に作品を携行、御届けする。

四月十二日
大丸にて佐々木・福岡、会し、小合氏礼の商品券を求め、大朝、大毎、京日、

日出、同盟通信の五社へ礼に行く。全菊水へも挨拶せり。
四月十三日
小合氏へ謝礼に行く。帝大新聞部へ写真一部送る。岡崎美術館え会期中の報告と共に礼状を出す。
四月十七日
各新聞社其他へ礼状発送。雑誌社へハ今月末発刊を待つて礼状を出す事とせり。
(高村佳子)

【塾展記録本文④、便箋貼り込み】
昭和十二年

三月二十一日 第二回塾展相談日 於先生御宅
先生より名古屋松坂屋美術部から名古屋に於ても本年五月頃、試作展開催につき申込ありたる旨御話あり。塾員の賛同希望あれば名古屋え塾より交渉具体化する様お話あり。

三月六日
名古屋松坂屋へ塾試作展開催の件につき照会の手紙を出す。
七月廿三日 座談会 於先生御宅
暫く延期されし名古屋展に付き愈々開催期日を交渉決定する事とする。

第一希望 十一月中旬
第二希望 全月下旬
第三希望 全月上旬
名古屋松坂屋展は、従来の制作本意の外に幾分一般向の作品も考慮する事にする。

八月五日 文展制作相談日 於先生御宅
先生の御発起により名古屋展には小品画の他に名古屋陸軍病院え献納画を贈る事にし、合せて陳列し一般に公開する事に決定。
八月二十五日 夜七時 於先生御宅
名古屋松坂屋の今秋展の名称、左の如く決定する。

十月二十七日
中村大三郎画塾秋季展覧会
塾員より報告を受けたる画題を清書し先生御宅を訪ね、先生の画題を承

り松坂屋^{〔京都店〕}京店に美術部中村氏を訪問し、出品目録及展覧会等の打合せをなす。

十一月二日 夜

塾員一同、作品持参。展覧会各係を定め、十時頃より松坂屋^{〔京都店〕}京店へ作品持参す。

十一月三日

会津・野々内、松坂屋に行き作品発送の打合せ及び写真を撮る。撮影作品（会津・佐々木・加藤・野々内）。

十一月八日

名古屋松坂屋より案内状及目録を送り来る。早速、先生御宅其他へ配布す。然し案内状数不足にて再請求す。

十一月十日

朝、松坂屋より案内状不足分着く。早速、未発送の塾員へ送る。午後、先生御宅へ御伺し先生にお目に掛り、夜、又お邪魔する事となる。夜、会津・加藤・福岡・野々内、先生御宅へ参集。展覧会に就き協議す。先生、明日、名古屋へ出張の予定の処、御作品の都合にて延期となる。帰途、先生の献納作品の額を春芳堂へ持参す。

十一月十一日

午前八時四十九分京都駅発の列車にて会津・野々内・黒田・福岡・中本、名古屋に向ふ。午後早々会場にて陳列にかゝる。福岡・中本の兩人、美術部の渡辺氏同伴にて各新聞社及び師団司令部外事部加藤大佐に挨拶に行く。午後五時半陳列終る。美術部係員諸氏に何かと御世話になり感謝にたえず。松坂屋裏西脇旅館に宿泊、福岡のみ帰京。先生御宅に電話す。夜半十二時半、先生の献納画（小野小町）の御作品を名古屋駅まで受取りに行く。今日、会場陳列中、名古屋朝日記者 中原政助氏来られる。

十一月十二日 曇後晴 公開第一日

午前九時、会津・野々内・黒田・中本・伊藤、会場に出席。先生献納画御作品陳列。尚、御出品作品、初雪、明朝より陳列出来る事になる。午前六時頃、先生より其由御電話にて御通知あり。午前中より観覧者多数あり。

売約作品 由里本「娘」、会津「秋」、黒田「果物の静物」

浅井正臣氏、石川英鳳氏来観。朝日・新愛知・名古屋の各新聞に記事掲載。

十一月十三日 大雪なれど午後晴天 第二日

午前十一時三十分、中村先生御来名。会場に御出席。伊藤及其一家、小野出席。先生御作品「初雪」（尺五堅幅）、本日正午過より陳列。午前中より来館者多く、午後に至り立推^{〔推〕}の余地なし。

伊藤「髪」、由里本「立女」、伊藤「笛」、以上売約。

市野享氏、安藤美霊氏、朝見香城氏、師団の高級副官齋藤中佐、加藤大佐、他四、五人来観あり。

十一月十四日 晴 第三日

午前九時加藤、正午中本出席。伊藤、午後来場。

午前・午後共に来観者多数。大阪毎日名古屋総局の川村行雄氏来観。加藤「みのり」、松井「浅春」、中本「婦女」、伊藤「柿」、以上売約。

大毎（地方版）、十三日付に記事あり。

十一月十五日 第四日

正午頃野々内出席、午後福岡出席、午後伊藤一家出席。

朝より来館者多数にて場内賑ふ。福岡玉僊氏来観。午後四時半頃、先生より会場の方へ御電話ありたり。草葉・渡辺両氏（美術部）に五円づ、商品券を送らる。各新聞記者に贈る可き色紙を渡辺氏に托^{〔託〕}す。

色紙作者（会津二点、小野一点、野々内二点）

五時半、盛況裡に閉会す。師団への献画を外し、荷造包装す。美術部主任安藤氏の希望により先生御作品「初雪」は預け置く事となる。猶、野々内作品「三宝柑」、「みのり」も置く。作品献納の為、福岡・野々内、西脇旅館に投宿す。

十一月十六日 曇小雨

野々内・福岡、九時半頃、松坂屋を訪ひ、美術部長安藤氏始め、渡辺氏外美術部関係者に対し、数日間、盛会裡に終り、又何かと配慮に預りし事に対し、挨拶をする。出品画返送の依托^{〔委託〕}をなし、先生の御作品始め、塾献納画作品計二十点、三包となし白布にくるみ、師団司令部恤兵部加藤大佐を訪ふ。同大佐の案内にて司令部副官室山中副官少佐に面会し、御慰問する。無事献納手続を終ふ。午前十一時、帰京の途につく。

（川上真由子）

【塾展記録本文⑤、便箋貼り込み】

三月二十六日 午後一時 於先生御宅

大阪松坂展の小品二十四点集る。先生に御内覧を願ひ、終了後、各自京都松坂屋仕入部へ搬入する。

出席者 会津、小野、野々内、室田、福岡、黒田、松井、加藤、上田、中本、田中

三月三十一日

正午頃までに松坂屋会場に塾員集合。作品陳列をなす。京都より作品運着の為、陳列遅れ、六時頃までかゝる。小野・福岡、新聞社に挨拶に廻る。大朝、大毎、時事、関西中央、大阪朝報。

大阪時事の岩津氏来観。上村松園先生、松篁先生、来坂中、立寄られる。作品の調子揃って居る為、会場の感じ好し。

出席者 会津、中本、野々内、小野、鍛冶、石田、福岡、田中

四月一日 第一日 晴

先生御作品「顔」素描、福岡持参。

久山作「牡丹」、野々内携帯。先生の御供し、十時頃会場に着く。右作品の陳列をなす。会津、出席。

来賓

大阪朝報 富樫氏 大毎美術 齋藤氏

塔影 大森富平氏 美術と趣味 高山辰三氏

時事新聞、加藤紫雲氏 関西中央新聞の黒田憲一郎氏

東丘社展へ会場より祝電を發す。大朝、大毎、京日へ会場より写真發送す。

大朝京都支局、大毎京都支局、日出新聞、同盟通信へも写真發送す。

本日記事掲載新聞 大朝、大毎、京日

四月二日 第二日 曇後雨

今日の出席 加藤十時、会津午後一時。

大阪にて撮影の作品六組及焼増卅枚出来る。午後三時半、東丘社より祝電来る。

宗教と美術編集主幹 奥田雀草氏来観。早朝来、観覧者多く、午後は一層混雑す。盛会なり。

四月三日 第三日 曇

今日の出席者 鍛冶、石田、上田

午前九時半、神戸『画室』社主 山本広洋氏使来店。塾展目録と先生御写

真を渡す。甲子園口駅長 藤田永明氏来観。本日、祭日にして各デパートも休日なれば、来観者非常に多く、終日盛会なり。

室田作「浅春」・「静物」売約なる。右のむね同君へ通知す。

四月四日 第四日 曇

出席者 松井、会津

先生素描写真焼増五拾枚、塾員写真焼増卅六枚、会場に持参。

東京雜誌社、美の国、阿々土、塔影、及び下店静一氏、神崎憲一氏宛、写真及手紙發送。

四月五日 第五日 曇

出席者 室田、川島、福岡、石田

午後より入場者相当有り。

四月六日 第六日 曇

出席者 会津、中本、石田

先生御予定出品作「風薫る」会期中に間にあはず。

来賓 美術通信 尾上豊徳氏、美術と趣味 高山辰三氏、辻本和兵衛氏、西山英雄氏、生田花朝氏、中村貞以氏

午後、会場の記念写真二枚撮影する。

記事掲載 大阪朝報。

四月十一日

大阪松坂屋小品展の札状發送する。

(川上真由子)